

# Max Weber の Ideal Typus 概念につきて

Weber, Max: Gesammelte Aufsätze zur  
Wissenschaftslehre. Tübingen 1922

歴史認識はある対象の唯一個別的なる意味をその認識目的とするものであるが、此際猶他種の方法若くは關聯に於て構成せられた概念的手段の使用を缺き得ない。第一には研究者の思索を導く手段として、第二には認識の成果を客觀的に理解せらるゝ言語に於て云ひ表す爲の手段として。これ吾々の認識の論證的アイスカリシツな性質、即吾々は單に表象の變化の鎖を通してのみ現實を把握し得るといふ事情に基くものである。研究を導く手段としては或は研究者は想像力を以て之れに代用し得るであろうが、その成果を他に言表し若くは敘述する際には、少くともかくの如き既に客觀的妥當性を有する他の概念的手段を缺き得ないであろう。Ideal Typus 概念はかくの如き概念的手段の一の形式である。

## 一

先に述べたるが如く Ideal Typus 概念は認識目的には關係なく、單に認識途上の手段であり、研究の heuristics: Mittel であるとするも、之等の手段としての概念が單なる象徴の爲の符號であるに止まらず、認識對象

をその具體的意味に於て認識する爲の合目的な手段である場合には、夫等の概念的手段も亦その認識對象を特性づけると同じ特殊の意味を具有すべき筈である。而して Ideal Typus 的構造を有する概念的手段が特に「歴史科學的認識に適合的」(後段九八五頁參照)なるは一にここに基くのである。以下この關係を Weber に從て描き出してみた。

吾々が文化人であり、世界に對して意識的に己が地位を取り、之れに文化としての意味を附與する能力と意思とを與へられて居る限り、かくの如き意味が何であらうとも、この意味は吾々をしてある現象をその意味より裁斷せしめ、これに對する吾等の地位を定めしむるのである。而して吾等がかくの如き價值の支持者として現實在を認識する時、その認識對象たる文化現實在は、かくして吾等に意味を附與せられ吾等の價值視點から擇び出されたる元來は無限に多様な現實在の一側面であり、かくの如き有限の一側面のみが知らるゝに値するのである。文化現象を因果的に認識する場合に於ても關係は同様である。ある具體的結果を導いた原因は現實在のまゝとして見れば無限に多様であつて、唯吾等に關心する結果の原因として第二次的に吾等から意味づけられた現實在の有限の一側面のみが歴史的原因として知らるゝに値するのである。

かくの如く歴史的認識の論理的性質が定められた上で、更に二つの問題が起つて來る。第一はかくの如き超越的前提なる文化價值の下に構成せらるゝ歴史的認識は、價值の支持者の異なるに從て又主觀的に異なるものであるか。Weber は之に對して次の如くに答へる。吾々が文化意味を附與した現實在の一側面のみが歴史的認識の

對象である限りそれは主觀的前提と結合してをる。乍然此事から直に文化科學的研究の結果が或一人には妥當し他には妥當せぬといふ意味にて主觀的であるといふ事は導き出されぬ。科學的眞理が眞理を求むる總ての人に對して妥當すべきである限り、一定の價值視點の下に於ても研究の方法に於ては研究者は吾等の思惟の規則を遵らざる可からず、かくの如き價值視點も、歴史哲學的任務としては、辯證的分析の道によつて他人に理解せしめ得るものでなければならぬ。之れ即ちある歴史的個體の *wertbeziehende Interpretation* を行ふ場合である。(最後の項、Weber: *Ibidem*, S 122 參照)(補註一、)

第二に一の價值視點に關係せしむる事によつて、かくの如き價值が(歴史哲學的に云へば)それに於て實現せられてをる現實在の個別形式即歴史的個體なり或はかくの如き歴史的個體間の因果的歸趣なりが、直に如實ワカユキニに把握せられ得た時には問題は無いのであるが、かくの如き如實の把握が不可能なる時少くとも疑はしき場合には如何にするか。かくの如き場合に於ては文化科學の領域に於ても普遍的概念、法則が手段として使用せられねばならぬ。如何なる方法で。何等特殊の意味を含まざる普遍的概念、法則を問題の特殊の價值視點に服従せしめる、換言すれば普遍化的認識の成果を個別化的認識の方法の中に於て加工し、認識目標に適合的な概念的手段に迄變形せしむる事によつて。この變形の行程を Weber は彼の所謂客觀的可能、適合的因果の論理的行程に於て展開した。(補註二、)

ある一條件とその結果との間の因果關係が明瞭ならざる場合には一、結果に先行した複雑なる現實在を思惟上

分析してその各組成部分が夫々普遍的經驗法則の中に入り得るまで之を分解する。二、かく分解せられ他から孤立せしめられたる各個條件の種々なる組合せから吾等が有する經驗的法則に従て、問題となれる結果に對して客觀的に可能なる、內的に矛盾なき原因關聯を構想して見る。三、さて吾等がその因果的意味を疑問とする條件がかくの如き關聯の中に含まるゝや否やを試み忝べる。もしもその條件が客觀的に可能なる因果關聯に含まれず、從てそれを無視しても問題の結果の因果歸趣が差支なく説明し得る時には、その條件は因果的に *unwesentlich* であると判斷せられる、もしもその條件が如上の構想的因果關聯に含まれ、從てそれを無視する時は客觀的に可能なる關聯に變化が生ずる如き場合にはその條件は因果的に *wesentlich* なるものと判斷せられる。他の關係に於て考へれば、吾等が一定の條件の群を一の結果の原因として認めんと欲する時には、經驗的法則に従て客觀的に可能なる因果關聯をそれ等の條件と問題の結果との間に構想して見る、もしもこの試にして不満足であつた場合には、この不足を充すべき新なる條件を更に擇び出すべき方針が與へられる。この行程は、普遍的法則に従て積極的に、分析せられ孤立せしめられた一定條件の組合せから如何なる結果が生ずべきかを問ふのではない。何が起り來べきか (*Was geworden wäre ?*) ……は理想的に完全なる材料に基く場合に於ても大なる確らしさを以て普遍的經驗法則から積極的に決斷せられ得ぬのである (*Indem S. 282*) 寧ろ此場合には、かくの如き條件が無かりせば既に確定せる結果に對して如何なる影響が及びたるべきかが問はれるのである。

かく客觀的に *wesentlich* であると判斷せられた條件の *wesentlich* な程度も、問題となれる一條件と結

果との關係丈を共通にし他の條件の組合せに於ては夫々他と異なる出來得る丈多數の諸關聯を比較して、即問題となれる條件が結果に及ぼすべき影響を多數の異なりたる他の條件の下に於て考へる事によりて之を比較的に測定する事が出来る。かくして得られたるこの條件と結果との間の最高度の客觀的可能なる因果關聯はその條件につきての適合的因果關聯と考へられ、この適合的關聯と比較する事によりて、具體の場合に於けるその條件の因果の意味の程度が比較的に決定せられ得る。例へばある條件が既に起れる結果に對して因果的に意義ありし事は明である場合に、然もこの條件を除外するも猶知られたる他の條件の群より客觀的可能的因果關聯が構想せられ得る如き場合に於ては（セルビヤに於ける暗殺事件が歐洲大戰争の口火なりし事は明なるも當時の各國對峙の形勢より早晚かくの如き戦争の起るべかりし事が假に客觀的可能なりしが如き場合）その條件は單に偶然の意味をしか有せぬと判斷せられる。

かく客觀的可能的行程は具體的問題と同一の價值視點の下に於てのみ行はるゝのである。從て普遍的知識が利用せらるゝといふ時、それは現實在を單純に要素と法則へ分析して特殊なるものを普遍的關係に包攝する事によりて直に客觀的基礎を與へんとするのではない。これ等の合則的知識に基き客觀的可能なる個別的關聯を先づ構想して見て、之れを手段として如實に把握し得ざる條件を現實在の中より擇び出さんとするのである。先に Weber が結果に先行する現實在をその組成部分に分析するといふ時、既に單純なる分析にあらず夫々一つの關聯の構成要素として意味づけられた條件が擇び出されるのである。

かくの如き個別化認識の手段として同一の個別化的視點の下に想像上構成せられた適合的關聯こそ即 Ideal Typus 的關聯である。Ideal Typus が與ふるものは必然的關係ではなくて單に適合的關聯である。

J. S. Mill は因果關係を原因たる事物と結果たる事物との間の働きの關係と考へた。従て一の結果 M とこれが原因たり得べき A 若くは B との因果關係の確らしさは A 若くは B のその働きの瞬間に於ける存在の蓋然率  $\frac{a}{b}$  とそれ等の夫々が存在せりとせばその結果を惹起したるべき蓋然率  $\frac{a'}{b'}$  との乘積の比  $\frac{aa'}{bb'}$  によりて判定せらるゝと考へた (System of Logic, Bk III. ch.8, §5) の Mill の考へに基いて近代刑法律學者の或者は、一の結果を惹き起す如き條件と之れを妨ぐるが如き條件との間には夫々の場合について客觀的に一の勢力關係を測定し得、或結果が起れりとは即この勢力の均衡が前者の方に傾ける事を意味すると主張する。丁度、吾々が體驗する、相對立する諸動機の争の間に一の行爲意思が決定せられる現象と同様に、此場合に相對立する諸條件と之等によりて決定せられる結果との關係が考へられてを。乍然 Vector をして云はしむれば、一の具體的結果はかくの如き相對立する、夫々にその結果を働き出す力としての條件間の争の產物にあらず、寧ろその結果がかくして而して他の何れでもなく成起する爲には、この結果に先行するあらゆる條件の總體が働いたのである。従て對象を因果的に研究せんとする經驗科學は、一の結果の成起を、抽象せられ靈活せられた數個の條件の働き合つた瞬間に決定せられたるものとしては説明する事を得ず、唯無限多様の條件から働き出された一の結果を永久に確定せるものと考へらるべき抽象的因果法則から説明せざる可らず。乍然、合則的因果關係を靈活して法則的關係から直に

具體的結果の生起する一點を掴み得るとする考へを斥くる以上、抽象的法則から如何にして問題の具體的結果が成起せりやを演繹し出す事は出来ぬ。寧ろこの場合には逆に具體的結果から出發して、吾等の法則的知識に基き客觀的可能なる因果關聯に合する如き有限の條件を無限多様な現實在から撰擇し出す事で足りりとしなければならぬ。一の條件が一の結果を成起せしむるとは夫故に、その條件がかくの如き成起を妨ぐる他の條件にも拘らずある瞬間に遂にその結果を惹起したといふ意味に解す可らず、唯隔離的に考察の下に持來された多様な條件中のある部分が、吾々の有する普遍的經驗法則に従へば通常當該結果を持來すといふ意味の判斷であり、換言すれば客觀的可能なる關聯を構想する時、他の條件の組合せを數々變化せしめて考へても、その特殊の條件は該結果に對して通常意味ある因果關聯を示すといふ事である。

以上 Weber が因果歸趣の客觀的可能的説明に關して述ぶる處に基いて Ideal Typus 的因果關聯の構造を述べたのであるが、多様複雑な現實在より一の價值視點の下に歴史的具體的概念が構成せらるゝ場合にも全く同様の構造を有する Ideal Typus 的概念手段が要求せらるゝのである。例へばカルピンの<sup>プレデステイナテオニス・シーレ</sup>先天豫定説を理解せんとして、然もその特性的内容を直ちに如實に把握し得ざりし場合に於ては、同一の價值視點の下に先づ知られたる主要命題から一方的鼓張<sup>パイクアップ</sup>によつて、散在し種々異なりたる風に存在し、若くは實は存在せざる個々現象を集めて、吾々が有する合則的知識に基いて内的に矛盾なき且最合理的な先天豫定説の思想的建築を構想して見て、扱てこの構想せられたる Ideal Typus と現實にカルピンが説く所とを比較する事によりて、先に明ならざりし具體的

内容を擇び出す事が出来る。即例へば一般に基督教的先天豫定説の主要命題より最合理的に構想せられたるその Ideal Typus と比較する事によりて或はカルピンがその先天豫定説に於て云ひ現せる動機の特性及この動機によりて特性づけられたる内容とを明かに知る事が出来、或はかくの如き主要動機が既に明なる場合に於ては、その動機に對して最適合的思想的形象を構成することによりてカルピンの先天豫定説に關する言説の中に、その動機より見て合理的ならざる點を發見する事を得、從て又カルピンがその先天豫定説を教へたる場合に彼に影響せる非合理的契機が存在その性質等をも之れを推知する機會が與へられるのである。この場合に於ても、かくの如き先天豫定説の Ideal Typus は直接カルピンの先天豫定説を働き出せる原因、即或は現象の背後なる實在的理念若くは事實上その當時カルピンを指導した思想的理念と混合せられてはならぬ。それは單に研究上の手段として內的に矛盾なく構想せられた想像的形象に過ぎぬ。從て又それは普遍概念の有する如き現實的妥當性を有せざるものであり、更に最初から特殊なる價值視點に關係する點に於て普遍概念とは異なりたる論理的性質を有する。

科學的知識は常に客觀的妥當性を求める。之れ即如實に、現實在より客觀的妥當の歴史的關聯を把握し得ざる場合に、自然科學的概念又は經驗的合的則知識の客觀的妥當性に基けてその客觀性を確立する事が必要なる所以であるが、普遍化的認識と個別化的認識とは全くその認識方法を異にせるものなるが故に、直ちに普遍的知識の客觀性を以て個別的關聯の客觀性の基礎とする事を得ない。普遍概念の一般妥當性を以て個別の概念の普遍妥當

性を直ちに基礎づける事は出来ぬ。従て客觀的可能の行程によりて普遍的認識の成果を問題の特殊な個別化的視點に服従せしめ、適合的認識手段即 Ideal Typus に變形せしめねばならぬ。歴史的關聯の認識とは、此際、Ideal Typus を手段として、無限多様な現實在中より客觀的妥當の對象を撰擇し構成することであり、従てその極限に於ては、例へば社會の多衆に曖昧に感得せらるゝ與論の如きはその Ideal Typus によりてのみ把握せられ得る、此際には手段が即目的に變貌するのである。(Ibidem, S. 197-198参照)この認識の目的觀的性質は人間精神をそれ自らに目的觀的本質と考へる思想と屢々混雜せられ、歴史家の人格に引かけてその内的體驗から直ちに外界現象の個別的特性が把握し得られる様に考へられた。歴史的認識は内的體驗の明證性を以て直接に把握が出来る様に考へられた。乍然歴史家が目的觀的に認識するといふ事と、歴史家の本質が目的觀的本質であるといふ事とは直接には關係なき二つの事である。猶又それは歴史家が自己の目的觀的本質を外界現象にも想定して、外界現象の個別的特性をその目的觀的本質にかけて認識し得るとする思想とは更に別の事である。(后段九九二頁)且又吾等がその中に人間精神の働く現象につきて感ずる明證の感情 Evidenz は以上すべてと本來全く關係なき他の事である。即人間行爲の理解に於ては、外的觀察を通してのみ近づき得る自然現象の把握とは異なり、内的に動的にその動機にかけて之れを説明し得る。従てその認識には特殊の現象學的明證性が附隨する。人間行爲の中でも合理的な、目的と手段との考慮に基く行爲にありては、單に感情的に理解し得るに止まる非合目的行爲に比して更に高度の明證性が附隨するのであるが、かくの如き明證性はそれ自身としては歴史的知識の妥當性

に何等の附加を爲し能はぬものである。その明證性の故に Ideal Typus による思惟行程が無用とならざるは勿論、又かくの如き明證性を伴ふ現象につきてのみ Ideal Typus の構成が可能となるものでもない。歴史的認識の客觀性が疑はしき場合に於ては、吾々が内的に理解し得ざる外的自然の事象につきても、吾々の理解を許す如き一般に人間の事象につきても、或は通常合理的行爲にのみ關係する經濟學的事象に對しても皆同様に Ideal Typus によつてその客觀的妥當性を基礎づけられねばならぬ。例へば崖より墜ちたる岩の具體的一破片が如何にしてかく墜ちかく破碎せりやの因果的關聯を歴史的に把握する場合には、單にこの現象を自然法則の普遍的關係の中に包攝せしめる丈では問題は解決せられず、その具體的破片の落下破壊の Ideal Typisch な關聯を通してのみ客觀的な解答に達し得るのである。反對に吾々が熟知せる友人の性格にかけてその具體的行爲を理解する場合に於てもこの性格はその友人の人格自體ならざるは勿論、吾々が同一行爲をなすべき際に體驗する性格でもない。實は内的に體驗し得る通常の人間の行爲の規則的知識に基き具體の場合に適合的に構想せられた Ideal Typus なのである。Weber がその「理解的社會學の基礎」なる論文に於て特に合理的人間行爲の Ideal Typus のみについて談るのは、この科學が特に合理的理解的解釋の格律モットーに従ふが故であつて、Ideal Typus 一般の論理的構造とは別の事である。(Bridem. S. 505 參照)この關係は歴史的個體につきても同様である。例へばカルビンの先天豫定説の如く一定の主要命題より理論的に展開せられたる教説に關しては、高度の明證性を以て之を理解する事が出来るのであるが、かくの如き創說者の教へから獨立した宗教的信念としてのカルピニズムスに

於ては、必ずしもかくの如き合理的明證性を以て理解する事を得ず、更に例へはかくの如き宗教的信念が忘れられて唯その結果現象なる合理的經濟的精神のみが習性的に各人を支配するが如き場合に到れば、既に理解的解釋の極限に達したのであつて、外的自然の科學的征服の場合に於ての如く外的にのみ觀察把握せられ得る。(補註三)然も之等の對象に附隨する異なりたる程度の明證性にも拘らず、客觀的妥當の基礎づけに際しては Ideal Typus の概念の使用を缺き得ないのである。

この Ideal Typus の價值關係的性質は直ちにそれが一般的に使用せらるゝ事を禁ずるものではない。と同時に Ideal Typus の一般的妥當は價值視點から獨立な普遍的概念のそれとは全く性質を異にせるもので、唯それが關係せしめられたる價值視點の一般的性質からのみ規定せらるゝのである。Weber は屢々ある具體的な歴史的解釋の際にその時丈の手段として構想せらるゝ場合單に之れを Hypothese と呼び、例へば經濟學に於ける法則の如く價值視點の一般的性質の故に一般的手段として利用せられ、從て概念的手段がそれ自らに特殊科學の對象となる如き場合に之れを Ideal Typus と呼んでをる。「かくの如く構成せられたる思维形象は純粹に個別的性質であり得る、即ち一の具體的個別的關聯の爲の憶説であり得る。……乍然それは亦一般的性質を有する Ideal Typus の構造でもあり得る。強度に合理的なる行爲の前提の下に、ある一定の經濟的狀勢の結果を思维的に構想する抽象的國民經濟學の「法則」の如き。(Ibidem, S. 130)乍然兩者の場合共に「かくの如き合理的合目的

的構想の、經驗科學によりて加工せらるゝ現實在に對する關係は自然法則とその Konstellation のそれではなく  
 づ Ideal Typus の夫れである」。Ideal Typus 的憶説と自然科學的憶説との相異を Weber は更に他の處に於  
 て次の如くに云ひ表してをる。即 Ideal Typus は具體的事象の説明に於て研究手段として使用せられる客觀的  
 可能なる概念である點に於て、自然現象に對する自然科學的憶説の關係に類するのであるが、自然科學的憶説に  
 於ては一般妥當性が不可缺に要求せられ、從て一度たりとも實際に妥當せざる事が確められたる時にはそれは憶  
 説たるの資格を失ふのであるが、Ideal Typus がある具體の場合に妥當的解釋を與へ得なかつたといふ事實は  
 他の場合再び之れを使用する事を妨げぬ。(Ibidem S. 131)

吾等が歴史的認識の道をとる時、特殊の價值視點から獨立なる普遍的な法則及概念から離れて、常に一の價值  
 視點に關係せしめられたる Ideal Typus 的な概念及法則をのみ適合的手段として用ひ得るは自然科學的認識の  
 方法と文化科學に於ける夫れとが範疇的に異種なるが故である。この厳しき兩科學の區別への洞察を Weber は  
 その因果律範疇に關する言説に於て次の如く述べてをる。

「各個の科學分科に適用せらるゝ因果律範疇の形式は即夫々又異なるものである。そして或意味に於ては——之  
 の事は全然同意せらるゝのであるが——それと共に範疇の内容も又變化する。その完全なる、謂はゞ「根原的」  
 unwichtiger. な意味は二つの事を含むのである、一方には夫々質的に異なる現象の間の謂はゞ動的紐帶とし  
 づの働を Wirken の思想と他方には「規則」Regeln に縛られてをる事思想と。而して因果原理の遂行を最

後の窮極まで真面目にやればその構成部分の或時には一つが他の時には又他の一つがその意味を失ふのである。因果律範疇の實質的内容としての「働き」及之れと伴へる「原因」の概念は、量的抽象の道によつて數學的相等が純空間的因果關係の表出として得られる時には即その意味を失ひ消え失せて了ふ。この場合にも猶因果範疇の一つの意味が堅く取り守らるべきであるならば、それは唯運動の時間的繼起のそれでのみあり得る。そして之れも又その本質に於ては永久に同等なるものの變態 *Metamorphose* の表出として妥當するといふ意味に於てのみ。——反對に因果範疇が時間を通して經過する世界經過の疑ひもなく質的な一回性及又一切の空間的時間的切斷面の質的個別性を顧みるが否や、「規則」の思想は消滅する。まさに一回的なる全宇宙的或は部分宇宙的發展に對しては因果規則の概念はいつもその意味を失ふこと、因果相等に對して因果の働きの概念がその意味を失ふが如くである……」(Ibidem S.134-5)

Alexander von Schelling 氏は其論文(註)の第六節に於て次の如く敘べてをる。文化科學は歴史的事實の個別認識をその研究對象とするにも拘らず、猶種々なる論理的構造を有する普遍概念を必要とし、又實際之れを使用する。以下に於て Max Weber によれば文化科學に特に適合的アタクマシな一種の普遍概念即 *Ideal Typus* を取扱ふと。(Schelling: Ibidem S. 709)又他の處に於ては、文化科學的知識は吾々の價值視點に於て意味ある、現實在の有眼なる一側面であるが之れ又猶無限多樣であり、從て整理を必要とする。Ideal Typus の論理的意義はこの整理の一方法として役立つ處にあると(Ibidem S. 709)

(註)

Die logische Theorie der historischen Kulturwissenschaft von Max Weber und im besonderen sein Begriff des Ideal Typus.

Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 49. Bt. 3. Heft. 1922. S. 623-752

この Ideal Typus 概念の意味を現象の普遍化的整理に認めんとする見解に基き、氏はその論理的構造を以て疑問的な經驗的妥當性を有する一種の普遍概念なりとする。即第一、歴史的個體の普遍化は無意味である、從て Ideal Typus は歴史的個體の全體性に於ては之れに關係せぬ。唯數多の歴史的個體に共通に現はれる如き側面關係を普遍化する。第二、乍然その普遍化の方法は類概念のそれとは異なる。即單に共通なる關係の抽象に止まらず、かくの如き關係も夫々異なりたる明瞭さに於て顯現するが、吾々はその最高度に明瞭なる場合の關係を想像して明瞭度の劣れる場合をその中に包攝する。Ideal Typus はかくの如き純粹想像的内容を有し、從て極めて疑問的な現實的妥當を有するに過ぎざるものであると。(Hidam S. 709-713)

乍然氏の「Max Weber によれば特に文化科學に適合的なる一種の普遍概念即 Ideal Typus 云々」なる章句の基くと思はるゝ個所に於て Weber は單に「吾々が文化認識に於てそれを使用して仕事をする概念……若くは理論」と敘ぶるに過ぎぬ。(Weber, Ibidem S. 186)且又「猶無限多様な歴史的文化的普遍化的整理」なる任務は Weber の言葉によりては何處にも言明せられて居らぬ。却て Ideal Typus を普遍概念なりとする氏には説明し難き矛盾が生ずる。即 Weber は氏が目して唯一可能なる普遍的 Ideal Typus 例へば都市の概念の他に猶

明瞭に個別的意味を有する中世都市經濟若くは原始キリスト教會等につきても Ideal Typus を構成した。氏はこの矛盾を Weber の不注意及誤謬に基くものなりとして次の如くに説明する。即之等の概念はリツケルトの所謂相對的歴史概念であつて一面から見れば個別的統一を有するが、その内容から見れば普遍的意味を有する。

Weber はその普遍的一面をのみ見て、直ちに之れを Ideal Typus に組入れたのであると。この氏の極めて不親切なる解釋は Weber が純粹に個別的な、相對的歴史の意味を決して含む事なき對象、例へばカルピンの先天豫定説につきても又 Ideal Typus を談る事實(Weber, *Ibidem*: S. 197)に更に矛盾する。且又氏が目して普遍概念なりとする都市等の概念も Weber をして云はしむれば一の價值視點に關係せしめられ Genetisch な性質を取得して始めて Ideal Typus となるのであつて、單なる抽象と分類とに關係する普遍概念としての都市の概念とはその意味を異にするのである(*Ibidem*: S. 201-202)

以上純粹に材料的な批判によつても氏の所説の維持し難き事は明瞭と思ふのであるが、更に之れを顧みて既に述べたる處と比較すれば次の如き相違點を明ならしむる事が出來よう。

第一、Ideal Typus 概念は認識過程に於て使用せらるゝ概念的な手段であり、認識目的には直接關係しないのであるが、夫れが認識目的と同じ價值視點に繋がつてをる點に於て單なる普遍的概念とは異なる適合性を有してをる。寧ろ單純な普遍的概念は Ideal Typus 化せられて始めて歴史的認識の手段となり得るのである。

第二、それは具體的歴史的關聯に比すれば常に一面的に鼓張し、出來得る限り所謂偶然的要素を排除した適合

的關聯である點に於て問題の一面にのみ關係すると云はれ得るが、同時にそれ自身一の個別的關聯に統一せられ  
 べき。

第三、Ideal Typus はそれな關係せしめらるゝ價值視點が一般的性質を有する場合には從て一般的性質を有し  
 得、Weber も又一般的性質を有する Ideal Typus、或は亦適合的因果歸趣の規則 Regeln der adaequate Verur-  
 suchung についで語るのであるが、之れは von Schelling 氏の主張する如く Ideal Typus を以て價值視點に  
 係らざるの意味にて普遍的概念とするのでは全くなす。

## 二

Max Weber に於ては普遍的認識と個別化的認識の兩方法は厳しく區別せられ、從て歴史的個別化的認識に  
 於ては、普遍的認識成果は直接にはその用途を見出し得ず、歴史科學的領域に於て理論と言ひ普遍概念といふ  
 時には、それ等は常に Ideal Typus 的概念として、即目的觀的認識過程に於ける手段概念としてのみ成立し得  
 るのである。乍然歴史的認識に於ける法則的知識の意味は常にかくの如く解され來つたのではない。此最後の章  
 に於て、從來考へられ、或は考へられ得べき個別的知識と法則的知識との關係についての考へ方と對立せしむる  
 事によつて Weber の立場を明にし、從て Ideal Typus 的概念が値する意味の所在を明にして見た。

近世に於ける社會科學發達の初頭に於ては、人間社會の根元的機構が理性の光を通して直接の明證性を以て把

握せられ得ると信ぜられた。彼等にとつては、これ等の一定不變の知識のみが永久の實在性を有するのであつて複雑な現實相は唯この確定せる自然の秩序の具體的な顯現と考へられる。従て具體的現實在は思辯的に得られた一定不變の法則的知識によりて完全に支配せられ得なくてはならぬ、もしもかくの如き支配が不可能に見えた時には、それは現實の墮落不完全によるものと考へられ、従て直ちに之れを自然の秩序に還さん事を要求する。この思辯的絶對主義的考へ方が永く歐洲思想發展の一潮流をなした事は疑ふべくもない。例へば經濟學の領域に於ては、フイデオクワット學派、バスマチアの徒に於ける樂觀主義的世界調和論及近代に於ける舊教的社會思想に於て之れを見る事が出来る。乍然 Weber をして云はしむれば、かくの如き自然法的立場はその世界觀の疑はしき前提が覆はれてをる間のみ認容を得るのである。

この思辯的絶對主義に對しては、傳統的に經驗を尊重する英國から最も鋭く反對の聲が擧がつた。例へばアダム・スミスがフイデオクワット學派の先達ケネーの經濟表を以て、精確に確定せられた運動と食物との割合によりてのみ人間の生存が可能なりとする思辯的醫師のそれに類する誤謬なりとし、生々の力に富む現實在には抽象的理論によりては遂に擱へ盡し難き「自然の知慧」が常に殘されてであると主張せるは衆知の事である。之の具體的經驗的事實の尊重、徒て理論的知識に對する名目主義的立場に於ては、具體的事實のみが意味を有し理論にはこの具體的意味が含まれてをらぬのであるから、元來理論は歴史的認識に於て何等直接の役立を爲し得ぬ筈である。精々效力疑はしき間接射撃の道具であるに過ぎぬ。もとより名目的な理論と雖も實用に役立てる爲の手段である以

上、方向丈は自ら具體的問題の方へ向いて來る。これ Weber が客觀的可能な因果關聯を示せる、蓋然的妥當性を有する Ideal Typus に對して、經驗的法則を以て蓋然的因果關聯を示せる經驗的妥當性を有する知識なりとし、然も兩者共にその論理的構造に於ては Ideal Typus なりとする所以であらう。更にこの經驗主義が自然主義的に着色せられて、經驗法則は一の具體的事物と他の事物との間の規則的な働きとの關係と考へられ、具體的事實が法則から演繹し出さるゝが如き外見を生じたのである。例へば市場に於ける需要と供給は相均衡する關係ありとの經驗的命題から價格が需要と供給の勢力の比を以て決定せられるといふ命題が導き出された。かくの如き法則の靈活につきては、Weber が現實に於て一の結果は無限多様な條件の連續の間に始めて生成するものであり、決して實在的原因としての數個の事物によりて働き出さるものに非ざる事實への注意を促したる次第は既に述べたる所である。(前段九七七頁—九七九頁參照)

Weber が已れと對立する立場として認める第三の考へ方は自然主義的方法論上の一元論である。即近代生物學が世界の歴史的生起の過程をも普遍的な進化の原理の概念の下に持來すに及むで、自然科學の隆盛はその頂點に達し、その影響の及ぶ處遂に社會的現實につきても又自然法則への分解が可能なりと考へらるゝに至つた。前世紀の七十年代に各國に起つた經濟現象の心理學的抽象の試みはその一例である。「彼等は正しくも法則の形成によりて現實在の歴史的認識に置き代へ、或は反對に歴史的觀察を並べる事によつて法則に至る事の不可能を認め」然も他方法則のみが科學的研究の對象である事を固く信じて、彼等はこれに到達する爲めに、吾々が人間

行爲の心理的關聯を直接に體驗し得るといふ事實から出發して、この經過を直感的に明證性を有する法則の中に取入れ得ると考へた。これ等の法則はその明證性の故に又直接觀察せられざる現象の經過にも適用し得るものでありかくして少くとも人間の心理に關する範圍に於ては自然科学的法則に到達し得るのである。ここから更に、先に認められた理論と實際との對立にも拘らず、現實在が法則から演繹し得るといふ意味に於て抽象的理論に經驗的妥當性が與へられた。即抽象的經濟學理論がそれ自身のみにて經驗的に妥當するといふ意味に於てではなく、もしも人が觀察の中に入り來る他の總ての要素につきて精密なる理論を打立てた時には、之等の抽象的理論が全部集まれば物象の眞なる實在がその中に包括せられねばならぬといふ意味に於て、「かくの如き結果が達せられる爲には、假令それが極度に簡短なる場合に於てもその當時の歴史的現實在の總體がすべてのその因果的關聯に至るまで、與へられ而して知られてをる事を前提とせねばならぬであらう、そしてもしも限りある精神にかくの如き知識が可能なりとすれば、抽象的理論が認識せらるべき價值ありとは如何にしても考へられぬであらうといふ事が此際忘れられてゐる。」(Hilsm. S. 188) Weber はかくの如き見解が自然主義的成心から誤まられたる誤解なる事、これ等の社會心理學的法則が成立するには却てこの法則的關係を包含する如き事實的關聯が知られてをる事を前提とするのであつて、從てこの際には心理學的法則から現實在が演繹的に説明せられるにあらず、既にその文化意義に於て知られたる個々の事象が心理的合則的知識に基きて更に深く理解せられる關係である、之等の心理的法則は自然科学的法則にあらずして Ideal Typus 的構造をのみ有し得ると主張する。

この第三の立場、自然主義的な抽象科學的方法の一元論の立場を先に擧げた二つの立場に比較すれば、既記の二者が或は徹底合理主義であつて具體的事實に實在の意味を認めず唯一定不變の自然法的秩序にのみ永久の實在性を附與し、或は徹底非合理主義であつて具體的事實にのみ實在性を與へ法則的知識の名目性を固く信ずるに對して、この第三の立場に立つ學者は現實在が非合理的具體的なる姿に於て其處に存在し、從て歴史的にその具體性に於て認識する事も意味ありとしつゝ同時にかくの如き具體的非合理的なるものも、夫々一定の視點から之れを抽象し合理的法則的關係に分解すれば最後には完全にかくの如き永久不變の法則に解け去る事を信ずる者である。之れを生活と學問の關係について云へば、第一第二の立場が或は主觀的な不可分な自己の生活を重し客觀的學問は單に之の生活上の手段と考へ、或は客觀的に明證性を以て與へられる規範的知識に主觀的生活を律する絶對的權威を與へるのに對して、第三の立場は自己が具體的な生活の主體である事は之れを認めるが同時に人間を觀察すればその具體的な生活が永久不變の人間の本性としての心理的法則に分解し得られる、寧ろ前者は後者の實物證明として觀察せられると考へるのである。彼等は具體的事實、主觀的自己を認めるが之等のものが具體的認識を要求する内的意味に於て生かされて居ないから外側から觀察せられ分解せられて了ふのである。この自己及自然を支へる内的意味を認むる事によつて第三の立場とは異なつて猶合理非合理を結合する方法が考へられた。

經濟學の領域に於ては、歴史學派が一方では現象を成生と見、絶えざる轉生と見ながら同時にこの成生が内的に統一を有する實在的本質の根元から派出すると考へてこの第四の立場に達した。例へばロッシヤは此世界

の生成の根元として、それに全體的關聯を與ふる支持者として、神慮現象の「背後地」の實在を認め、この神慮は有限なる人智を以ては測知し難いのであるが、唯それが吾々の人格・國民性を豫定的にこの全體的關聯と矛盾なき統一不可分の本質として創造した事丈はわかる。従て人間の現象は總てこの個性的な國民性又は人格によりて支持せられ、従て又必然的に個性的統一を具有するものである。此關係はクニースに於ても同様である。彼に於てはロッシヤーに於ての宗教的敬虔に基く神慮の不可知性なる思想は消えて、形而上學的な人格・國民性・人類なる內的に統一ある實體が最初から前提せられ、この支持者に支へられる事によつて各個現象が夫々個性を具有するに至る。乍然彼等に於ては、かく歴史的個體がその支持者の個性に引かけられて擇び出さるゝ場合に、この支持者なる國民、人格が內的統一の故に非合理的意味をもつと同時に合理的顯れを有つてを。従て歴史的本質的なるものが同時に繰返して生起する普遍的な性質を取る。ロッシヤーはこの關係を國民とその法律の關係にならへた。同様の理由から因果律と因果法則とが同一視せられ、更に例へば因果關聯に於ては重要なものが重要さの劣れるものの原因であるとのロッシヤーの思想に明なる如く、一般的關聯と一般的妥當とが混同せられ、かくして歴史的知識と法則的知識とが結合せられた。これロッシヤー及クニースが具體的行動の不可分なるを認めつゝ猶或は豫定的に調和する利己心と愛他心の二元的要素より(ロッシヤー)、或はその中に愛他心及正義觀念等をも包含する一元的自己保存の衝動より(クニース)經濟學理論を打立てんと企てたる所以であらう。

かくの如き非合理的不可分であり同時に內的統一の故に合理的な意味の支持者に係はる所から歴史的認識の特

性を説明する立場に對して「ロッシヤー、クニースと非合理性の問題」(Ibidem S. 1-145)なる論文に於て Weber の批評する所を見れば第一、彼等に於ては歴史的事象の個性價值は人格・國民なる實體的價值の支持者から派生すると考へられたが、かくの如き實體的價值の根元の存在は經驗的科學によりては基礎づけられず、寧ろ吾々が個性的價值視點から對象を觀察するといふ前提の下に始めて、對象が個性的なるものとして認識せられる。故に價值關係的に認識する立場を取る限り、自然にも又個性的不可分性が附與せられる。例へば水が酸素と水素の二要素より成るといふ時吾々は水を出+Oとも見る事が出来れば又不可分なそれ自體として意味を有する「水」としても見る事が出来る。この價值關係的に觀察せらるゝ時、結果が之を構成せる諸條件と質的に異なる意味に於て現はれるといふ事が又成生なる概念の眞の意味である。それは決して價值的實體の創造を意味するのではない。かく人格・國民等の精神的根元に支持せらるゝもののみが個性的不可分なのではない、外的自然も又個性的不可分なるものとして認識せられ得る他面に於て、彼等が外的自然のみが自然法則の確定可變の支配の下にありと考へたゝも正しくない。外的自然もその現實のまゝとして見れば無限多樣にして、それが確定不變の法則的關係に於て現はれるのは既に吾々が之れに對して抽象的認識の立場を取りしが故である。この立場に於ては人間の事象も同様に法則的關係の下に持來し得るのである。

第二、かくの如き對象の客體的本質的差別に基く歴史學派の見解に對する疑が認識方法に關して如何なる結論を導くか。彼等は人間の事象を創造する根元として人格國民等の支持者を認め、この支持者の不可分なる意味の

故に人間の事象は抽象的理論を以てはそれを解釋する事を得ずと考へると同時に、自ら價值的本質である吾々は主觀的方法によつてこの人格國民性等の主體を直接に體驗し之れを全體的に感得する事が出來、從てかくして感得し得た支持者に引かける事によつて世界の關聯をその内面から、その根元的動機から理解する事が出来る、人間の關聯の中に支配する非合理的にして同時に合理的なる、具體的にして同時に法則的なるものを認識する事が出来る<sup>と考へた</sup>。Welterをして云はしむれば乍然、人間の關聯が理解せられ得る、動機から説明せられ得るといふ關係は、吾々が動的な價值行爲の主體たる本質を有するといふ事實と直接の關係なき別の事である。寧ろ吾々が對象をその動機から內的に説明せんと欲する、吾々が理解的認識の格律に従ふといふ前提の下に始めて成立するのであつて、かくの如き立場が取らるゝ以上、吾々とその本質を同くせざるもの例へば、獸類植物につきても同様の方法が可能なのである。生物學、植物學に於て現象をその合目的性より理解する、然もこの際形而上學的な價值感官の假定を導き入るゝ事なく單に生存保特の見地からの合目的作用として理解し得る如きが此場合である。既に述べたるが如く、人格の概念は實在的なそれから必然的因果的に人間行爲を演繹し出し得る如き本質を意味するにあらず、却て人間行爲の關聯を理解する手段として想像上構成せられたる Ideal Typus の性質を有するのである。(前段九八(二頁參照)(補註四、)

吾々が自己の衷に省みて自己を不可分なる自己として生かすあるもの、世界の意味、生活の價値—を體驗する時、そこに吾々に「業」がある、衷に促しを感ずる。扱てこの衷よりの促しに對して二つの態度がある。一つは

直ちに自己をこの價值的實體と同質と考へる、意味の根元と考へる。この場合には業とは自己の本質から必然なる派生である。此れが歴史學派を基礎づけた信仰であつた。他の一つはこの意味を感じる、意味ある業に促されてゐる事を認めるが、それから直ちに自己をこの意味の根元とは考へない、又そう考へる事は許されないと考へる。従てその意味は業をなす間丈存する、若くは意味ある働きを努力する限りその前提として意味がなかるべからずとする立場である。この對立 Troeltsch の所謂浪漫派的理想主義と實證論的理想主義の對立が Weber が歴史學派の方法に對する批評の間に明かに現はれてゐる様に思ふ、即第一、彼も亦彼等と同じく對象を個體化する原理は自己がその對象に實現せられてゐる價値に對して地位を取る事であるとするのであるが、彼等がこの對象の個性的價値をその實體的價値の本質に基けて説くのに對して、彼はかくの如き形而上的根據が經驗科學によりては到達し得ざる事の確認から出發して、價値關係的認識の格律に従ふ限り前提せざる可らざる前提としてのみ對象に個性的價値を認める。第二、彼等がその對象を派生論的目的觀的本質の支持者にかける事によつて全體性に於て體驗し得ると考へたのに對して、彼に於ては客觀的妥當的認識の要求を前提として、無限多様な現實在の中から出來得る限り客觀的な認識の對象を構成しようとする。認識への努力の間からその對象が始めて構成せられる。もとよりかく構成せられたものは實在性への要求を有し得ないのであるが、妥當性への努力に支へられる限り妥當性を有する。この働フアンクシヨナルきに於ての目的觀的關係は個別化的認識、普遍的認識の認識目標についても同様である。吾々が個別化的認識の格律に従ふ限り、あらゆる努力は個別化へ方向づけられる。認識目的につ

きて然るのみならず認識手段につきても。これ Weber が個別的認識の道に於て認識手段につきても又個別的觀念の構成に努力せる所以であり、Ideal Typus がその論理的性質に於て必然價值關係の概念なる所以である。第三、更にこの實體的と働きのとの對立から歴史學派の立場に於ては對象は常に統一的な、全體性に於ての個性を有するのに反して、Weber に於ては働きの目指す一面、價值に關係せしめられたる一側面丈が問題の中に入り來る、從て個別的といふ時この一側面丈の内容に於て云はれるのであつて、同一の現實をも他の側面が價值に關係せしめらるれば異なりたる内容に於て又個別化せられ得る。Weber が歴史的概念及 Ideal Typus 的概念が同一の現實在例へば資本主義の精神につきて數多く、而も夫々他と異なりて成立し得て、猶夫等の何れもが正しき認識若くは認識手段として認容せらるゝといふはこの所以である。この視點が必然的に他と對立的のみに自己を決定するといふ關係に又あの具體的認識と法則的認識との峻別が基礎づけられてをり、更に又この關係からあの認識の世界と他の情・意の世界との峻別、吾々が客觀妥當的認識を求むる以上は單なる主觀的感情體驗の基礎づけに甘ず可らずとの Weber の熱情が理解せられるであらう。客觀的可能の行程の論理も Ideal Typus 的概念もすべてこの熱情の產物である。

この歴史學派と Weber との間に認識方法上立てた對立は、これを人世問題に移せば多少のモディファイケーションを以て、全人の理想と専門家の理想の對立と見る事が出来るであらう。已か擇びたる一業を神によりて召さ

れたる(Berufen)職業(Beruf)として精進する理想が如何に近代文化殊に經濟的文化に貢獻せりやを Weber はその「基督新教倫理と資本主義の精神」なる勞作に於て(Max Weber: Religions soziologie. I. S.17—206)よく描出したのであるが、その方法的論文集中に收められたる「職業として見たる學問」なる一篇に於て、彼自らその理想に精進する者なる事を吾々に示してをる。その内容に亘つて之處に敘述するは當面の任務を踏出す業である。章中の一句を紹介して擧策しよう。

Verehrte Anwesende! „Persönlichkeit“ auf wissenschaftlichem Gebiet hat nur der, der rein der Sache dient.

(敬愛する諸君、學問の領域に於て「人格」とは己が業に純粹に仕ふる人のみ有するものである。)

補註一、この超越的價值視點に關する彼の純人間的、主觀的態度は、價値の體系の哲學的基礎づけを志す Hickert に對して Weber の特色ある對立を示すものと思ふ。この個人的價值肯定を以て、全く學の領域以外の事態なりとし、又何等かの宗教的或は形而學上の基礎に依頼することなく、唯この彼自ら肯定せる價值視點の下に現實<sup>1)</sup>を構成せんと努むる、Trochsch 所謂 Weber の herischer Skeptizismus は、(Trochsch: Der Historismus und seine Problem S. I. 565-571 參照)彼の「職業として見たる學問」の中の次の言葉に誇らかに云ひ表されてをる。

Heute aber ist es religiöser „Alltag“. Die alten, vielen Götter, entzaubert und daher in Gestalt unpersönlicher Mächte, entsiegen ihren Größen, streben nach Gewalt über uns:r Leben und beginnen untereinander wieder ihren ewigen Kampf. Das aber, was gerade dem modernen Menschen so schwer wird, und der jungen Generation am

schwersten, ist: einem solchen *Alltag* gewachsen zu sein. (Weber, *Ibidem*: 515-517)

そしてこの彼の實證的性格から、彼が價値の客觀性を、その具體的な場合に於ける意味内容を冷靜に分析することによりて解釋(Interpretieren)し、或は又後に述ぶるが如く個別的因果關聯の客觀性を、その現象經過の中に見出し得る因果法則的關係の客觀性に基き、客觀的可能の行程により、或は *Ideal* typische Hypothese の使用によりて説きせんとする彼の要求が説明せられ得る。

補註一、 Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik I. Objektive Möglichkeit und adäquate Verursachung in der historischen Kausalbetrachtung. (*Ibidem*: S. 266—290)

補註三、 例はゾンバルトが近代企業家の特性を小兒心理學に教へる心的状態の類推より説明するが如き場合がこれである (Sombart, W.:—*Der Bourgeois*, S. 272ff)

補註四、 Weber は歴史科學的對象の理解的認識への要求を強く提唱する。「吾々の因果的要求は、原理上理解的解釋が可能なるに際しては、かくの如き解釋の行はれん事を欲求する。換言すれば、人間の行爲の解釋に於ては、單に經驗的に觀察せられたる生起の規則へ單純に關係せしむる事によつては、假令その規則が如何程精密なるに於ても、吾々を満足せしめ得ぬ。吾々は行爲の「意味」にかけての解釋を欲求する。個々の場合に於て、かくの如き意味が直接明證的に確定せられ得る時には、夫等の具體的な個々の場合を包攝する如き生起の「規則」が形成せられ得ようが得まいが吾々はそれに無關心であり得る。……かくの如き理解に達する事なしには、法則的に起り來る反應の事實の經驗的統計的證明は認識の性質に従て、吾々が歴史及この點に於てそれに類する「精神諸科學」に課する欲求に及び得ない。(Ibidem, S. 69-70)

(吾々は研學の一法として吾校の先輩教官諸氏と相集まり討論會を催し來つたのであるが、嘗て自分がウェーバーの歴史的著作のあるものに親しみしの故を以て、その席上彼の *Ideal Types* 概念につきて報告を求められた。他にその人乏しきにあらずるにも拘らず平生論理の道に暗き自分がこの紹介を企てたのは全く以上の如き偶然に由來するのである。讀者の諒承を乞ふ。)

村 松 恒 一 郎